働くあなたのクリニック

股関節疾患シリーズ　その1

股関節唇損傷ってどんな病気？

今月の先生

岐阜市民病院
加藤　充孝氏

リハビリテーション科部長
整形外科　副部長

平成４年三重大学医学部卒
股関節疾患が専門
日本整形外科学会専門医
日本整形外科認定リウマチ医
日本整形外科認定スポーツ医

最近、某お笑いタレントが股関節唇損傷で手術との報道もありましたが、股関節唇損傷とはどんな疾患でしょうか。股関節唇とは股関節の骨盤側（臼蓋）のへりにつく軟骨性のヒダのことです。これは股関節の安定性に寄与していると考えられています。スポーツにおける負荷や怪我、あるいは股関節の形態異常が関与しこれが断裂したり変性したりして症状がでます。心当たりなく突然痛みが生じることもあります。

股関節唇損傷はどのような症状を示しますか？

A 車の乗り降りやしゃがみ込みなど股関節を深く曲げたり捻ったりする際や、階段の上り降り、あるいは寝返りをうつ際、股関節のあたりにズキンとする一瞬激しい痛みが走ります。症状が強いと歩行や立位でも痛みが出現します。パキンと股関節付近での音を感じたり関節がずれるような違和感を感じたりすることもあります。

ポイントはじっと安静にしているときには痛くなく、股関節を曲げたり捻ったりするときに痛みが生じることと、股関節の前方に痛みを認めることが多いことです。

どのような診断をするのですか？

A 股関節唇損傷はレントゲンだけでは診断が困難です。股関節唇は線維性軟骨でできているのでレントゲンには映ってきません。股関節を直角に曲げて脚を内側に捻ると痛みが誘発されるサイン（Impingement sign）、寝転んで胡坐をかくように膝と股関節を深く曲げ股を開くようにすると痛いほうの股関節の開きが悪いといったサイン（FABER test）が陽性のときは股関節唇損傷を疑います。また、鼡径（そけい）部のあたりを押すと痛みを訴えるケースも多く、診断の参考とします。画像診断が必要な際には特殊な磁気共鳴画像（MRI）撮影が有効です。

治療しないとどうなりますか？

A 股関節に形態異常がある場合は、軟骨の損傷を伴い変形性股関節症に移行する場合があります。変形性股関節症が進行すると疼痛が慢性化し歩行困難が生じます。形態異常は単純レントゲンでわかることもありますが、CTやMRIを撮影することで明瞭となることもあります。特にMRIは関節唇断裂の診断を兼ねてお勧めすることが多いです。骨盤側のかぶりが悪いような臼蓋形成不全症では屋根をつくる臼蓋形成術や骨盤や大腿骨の骨切り術が必要であったり、大腿骨と骨盤がぶつかるような場合ではぶつかる部分を削ることが必要であったりします。股関節の形態異常を伴わない場合、自然と痛みが和らいでくることも多々あります。

どのような治療をするのですか？

A 安静や痛み止めの内服、股関節への注射で症状が良くなってくることもあります。しかし、痛みが強く日常生活に制限がある場合や長く痛みが続く場合は手術を行います。手術は関節鏡（内視鏡）での方法と、切開して股関節を脱臼させ処置を行う方法があります。股関節鏡では1cm弱の皮膚切開を二つ作り、一つのポータルより内視鏡を挿入して関節の中を覗き、もう一つのポータルより先で処置ができる細い棒を挿入し、処置を行います。その場合は比較的低侵襲ですので数日の入院で済むことが多いです。